

CBRC Newsletter

<http://www.cbrc.jp/>

17



異文化の研究環境の融合が生み出す生産的研究

エッセー P.1

トピックス (9月開催シンポジウム)>

研究紹介 (野口、清水)>

お知らせ・成果紹介・研究員紹介>

マイケル・グロミハ

(Michael Gromiha)

生体膜情報チーム 研究員

はたして研究環境の違いとは、生産的な研究を進める上でどれくらい重要な要素となるのでしょうか？私はこれまでに、様々な国で研究する機会を得てきた経験を通じて、ずっとこのことを観察してきました。

私は、母国インドの学校で研究者の卵としての教育を受けましたが、それは学生と教授との直接的で厳格な師弟関係を軸としたものでした。大部分のセミナーと議論はインドの母国語ではなく英語で行うように指導されていました。研究所で受けた研修コースでは、各々の分野ごとに強力な基盤知識が身に付きましたが、このことが、後年に行った個々の研究において、私に確固とした強い確信を生み出させてくれる原動力になりました。

私が留学していたヨーロッパ、およびオーストラリアとニュージーランドでは、各分野で最前線の研究に取り組む研究者が多く、その後の重要な進歩につながる成果をあげていました。彼らの研究はハードで、本当に真剣に取り組んでいましたが、

一方でプライベートな社会生活(例えば、仲間とリラックスして交流する時間や、屋外での活動、家族とのふれあいの時間など)も重要視しており、研究と同じくらいの時間を割いているようでした。

アメリカ人は、研究成果を人にプレゼンテーションすることがとても巧みで、どんな研究であれ、創造的な仕事に仕立て上げることができました。研究者同士がお互いに激しい議論を繰り広げながらも、後では何事もなかったように共同研究を行えるというポジティブな面を持ち合わせていました。

現在、私は既に10年近く日本で研究していますが、一般的に日本人は、多くの時間を研究に費やし、たいへん勤勉だと感じています。そのため日本のテクノロジーは他の国と比較して革新的で、きわめて精巧なんでしょう。しかし一方で、国際的な研究者達とプライベートな話や研究議論を行う上では、言語の違いが若干のバリアになっていることは否めないようです。

以上、研究生活上での“お国柄”を私の体験をもとに示してきました。このように異なる母国、専門知識、才能、研究への取り組み方、施設、言語等を有する研究者間をつないで、国際的な共同研究を積極的に推進することは、より生産的な研究成果を生み出すための起爆剤になるはずで、さらに言うならば、柔軟な雰囲気を持ち、設備が整った研究環境は、研究者達を動機づけ、革新的な成果を挙げるためのスパイスになるだろうと思います。

